

獣医師／神経科
武藤 陽信
第2高度医療センター勤務

動物看護師
中村 紫鳳
第2高度医療センター勤務

動物看護師
齋藤 優美絵
第2高度医療センター勤務

「診断の取りこぼしを少なくする
1.5次病院でこそ専門科の
存在意義が発揮されると思います」

専門医療ひとつの柱：脳神経外科チームの新たな挑戦

専科医療だとしても油断せず
他の病気の可能性にも目を向けます。
そのために必要なのは総合的な知見です。

Q：専門科があると何が変わりますか？

武藤：ひとつには症例の見過ごしや取りこぼしが少なくなることで、さらには獣医師もスキルアップすることです。神経科でいうと、除外診断が多く、似た症状を出す他の病気をしっかり理解して、ひとつひとつ除外していくことで「本当に神経の病気なのか」を見極めていかなければなりません。

他の病院でのケースですが、神経の病気なのではという先入観からレントゲンが撮られていないことがあり、撮ってみたら骨が溶けていたということもあります。

完全二次（高度医療のみ）の病院では、すでに絞り込みが行われた後の症例が紹介されてきます。ある意味では分かりやすい神経の症例が多くやってくることになり、その影には気づきづらい症例が見過ごされている可能性があります。

当グループのように専門医や認定医自身も一次診療も行う1.5次病院だからこそ、その知見を院内に共有することで、あらゆる可能性に目を向け取りこぼしがなく拾い上げる体制を築くことができると思います。

また、専科の存在により獣医師だけでなく看護師のスキルもアップしていると思います。

斎藤：神経科では手術して終わりではなく、その後のケアによって1日1日の回復具合も大きく変わってくるので、より注意して目を配る習慣ができたと思います。

中村：獣医師たちは専門医の立場で臨みますが、看護

師たちは現場で経験を積みながら、もっとしっかり勉強して底上げをしていこうと思っています。

一方で専門分野に視点が偏らないように、まずは基礎からしっかり身につけることで、専門分野へも生かされると考えています。

Q：チームの現状について？

武藤：グループ内では心臓外科が専科としても確立されつつありますが、神経科も豊富な経験を持つ第2高度医療センター長の大竹先生と私が中心となって立ち上げました。まだ完全に神経科チームだけの手術件数は少なく他の科の先生たちのサポートを受けながらですが少しずつ実績を積み上げています。

中村：手術中のサポートはもちろん、術後の入院管理についても、日々勉強を続けながら成長していきます。

成功のカギは院内での知識共有と連携体制

Q：専門科を確立する上で大切なこと？

武藤：病院が多拠点に分かれている事で、連携のタイミングにバラつきが出たり、実際に診てみないとわからないと感じることもあります。

しっかりとした連携体制を築くためには、グループ内の獣医師に病気について広く知ってもらうことが重要だと考えています。特に神経科は特殊で、脳のどこに病気があるのかで症状が変わってくるので、今は院内でセミナーを開催したりしながら「まず知ってもらうこと」から少しずつ知識をつけてもらうことを大切に活動を続けています。

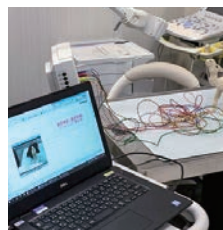
Column 日本でも数少ない高度医療設備

〔筋電図〕



筋電図は筋線維から発生する活動電位を可視化することができ、筋肉の収縮性やその異常が筋肉疾患、神経疾患の何れかを調べることができます。

〔脳波計〕



脳波計は、頭部（頭皮）のあらゆる部位に電極を設置して、脳の電氣的信号を記録する機械です。

脳波に異常が認められるということは、大脳の機能障害を示唆し、てんかん診断や脳死判定などに用いられます。